

第 50 回日本臨床細胞学会総会

子宮がん集団検診における標本の適否の検討

～従来基準とベセスダシステム適用の比較～

(財) 福島県保健衛生協会¹⁾, 慈山会医学研究所附属坪井病院婦人科²⁾,
公立大学法人福島県立医科大学医学部産科婦人科学講座³⁾

○千葉聖子(CT)¹⁾, 荒木由佳理(CT)¹⁾, 添田喜憲(CT)¹⁾, 塚原 孝(CT)¹⁾, 柴田眞一(CT)¹⁾,
菅野 薫(MD)¹⁾, 森村 豊(MD)¹⁾²⁾, 添田 周(MD)¹⁾³⁾, 山田秀和(MD)³⁾, 佐藤 章(MD)³⁾

【目的】 ベセスダシステム 2001 (TBS) では、扁平上皮細胞が推定で 8,000～12,000 個以上含まれるものを適正標本とすると明記されている。従来、当施設では細胞数が少ないと思われる標本についても、可能な限り専門医と協議し判定してきた。今回、TBS に準拠した子宮頸部細胞診報告様式の導入により、TBS の基準を用いた検体の適否の評価が必要となった。そこで、TBS を適用した場合に考えられる不適正標本についての問題点を検討した。

【方法】 平成 20 年度子宮がん集団検診にて、検体の適否評価を、当施設で実施してきた基準での評価 (従来基準) と、TBS の基準を適用した評価 (TBS 基準) の 2 通りで行った。平成 20 年 4 月～10 月に実施した 52,373 件を対象とし、両者での不適正標本の発生状況 (件数、年齢構成) について検討した。また、従来基準の不適正標本については出現していた扁平上皮細胞の数を計測した。

【結果】 従来基準での不適正標本は 49 件 (0.09%) であった。TBS 基準での不適正標本は 344 件 (0.66%) であり、従来基準の 7 倍の発生頻度があった。TBS 基準での発生年齢は 50 歳以上に多く見られた。従来基準での不適正標本における扁平上皮細胞の出現数は平均 300 個であった。

【まとめ】 TBS の基準を用いて標本の適否を行うことは、細胞診の精度管理上重要で

ある。しかし、TBS 導入により不適正検体が増加し、特に細胞採取が困難な高齢者層で再検査が多くなることが懸念される。集団検診受診者の年代層は幅広いので、TBS の基準を厳密に用いるのではなく、臨床医側と協議の上、検診に則した検体不適正の基準を導入する必要があると考える。